『騎兵隊』における「人物」－ゲダリとイリヤ・ブラツラフスキイ－

中村唯史

1.

イサーク・バーベリの『騎兵隊』には無数の人物が登場するが、彼らを一般的な意味で「人物」とみなすことができるかどうかは、批評家・研究者の間で意見の分かれるところである。確かに『騎兵隊』本文と従軍日記とを読み比べると、前者に登場する人物の多くが戦争中バーベリの実際に出会った人々をモデルにしていることがわかる。だがその反面人物描写におけるデフォルメ・彼らの言動の様式化は、読者が彼らを呼吸し時には泣いたり笑ったりする生身の人間と感じることを難しくしている。

このことには『騎兵隊』諸作品の‘ミニアチュール’と呼ばれるまでの極端な短さも関係しているだろう。各作品が平均３－４ページの時空間の中で、『騎兵隊』の登場人物には日常的な言動をなす余裕がない。人間とは、時と場合に応じて多様な側面を持ち、様々な体験を経る中で次第に変わっていくものだろう。だが『騎兵隊』の登場人物達は、或る特定の状況の中で或る一つの側面を読者に提示するだけである。アフォンカ・ビダやキリストのサーシュカ或いはリュートフの様に数編にわたって登場する人物の場合にも、何らかの経験を通して彼らが変化するということはない。彼らはいつまでも読者の前に現れた時のままである。『騎兵隊』の人物たちは本質的に「静止的」であり一面的である。したがって『騎兵隊』の人物が図式的であるという批判はそれなりに正当であろう。

だがそれぞれの作家にはそれぞれに固有の手法がある。バーベリ自身の、自分の手法に関する簡潔な定義をここに引用しよう。

引用１・Дело вот в чем, в том, что у Льва Николаевича Толстого хватало темперам--ента на то, чтобы описать все двадцать четыре часа в сутках, причем он помнил все, что с ним произошло, а у меня, очевидно, хватает темперамен--та только на то, чтобы описать самые интересные пять минут, которые я испытал.（２／４０１）＊1

（　要はレフ・ニコラエビッチ・トルストイには一昼夜２４時間すべてを書くだけの情熱があり余っていたということです。その上、彼は自分に起こったこと一切を覚えていました。一方私はと言えば、どうやら自分の経験の最も興味深

い５分間だけを書くのが精一杯、そういう気質なのです。）*2

『騎兵隊』の世界は、「最も興味深い５分間」－クライマックスのみによってつくられている。緊迫した極限状況、そしてその中での登場人物の言動だけが読者に示され、そのような状況に至る過程・そのような言動をなすに至る人物の前歴に関して、記述は全くないか、あっても副次的な意味をしか持たない。バーベリの手法は、ゾラやツルゲーネフに代表される１９世紀の作家達の環境決定論的な発想には無縁だった。『騎兵隊』において登場人物は多くの場合、論理的に説明のつかない言動をしている。

だがその反面、作品世界の内部は堅牢な建築物を思わせる合理的で整然とした構成をなしている。既に述べたように『騎兵隊』においては登場人物の極限状況におけるパトスだけがいかなる説明もなく読者に示されているのだが、このパトスに無縁な要素・関係の薄い要素はバーベリによって作品から切り捨てられている。『騎兵隊』の個々の作品は、夾雑物のない純粋な世界である。作品を構成するすべてのディテール・表現が登場人物のパトスに帰結していく。したがって作品内のディテール・比喩その他に丹念に注意を払い登場人物のパトスを十全な形で感じ取ることが、『騎兵隊』の読者には要求されるだろう。

本稿ではこのような作業の一環として、『ゲダリ』『師父』『師父の子』の３編に姿を現す登場人物ゲダリを取り上げる。おそらく彼は、アポレク様と並び最も忘れがたい印象を読者に与える人物であろう。「『騎兵隊』中最も感動的な形象」と呼ぶ研究者もいるほどである。*3

２．

荒廃したジトミールのバザールに一人佇み「善人のインターナショナル」を夢見る老人ゲダリは、実在の人物がモデルになっている。従軍日記６月３日の項に書き留められている人物がそれである。*4

引用２・Стекло к часам　１．２００ р.Рынок.Маленький еврей философ.Невообразимая лавка.-Диккенс,мётлы и золотые туфли.Его философия--все говорят,что они воюют за правду и все грабят.Если бы хоть какое-нибудь правительство было доброе.Замечательные слова,бороденька,разговариваем,чай и три пирожка с яброками-７５０р.（１／３６２－３６３）

（　時計用のガラス１２００ルーブリ。バザール。ちっぽけなユダヤ人哲学者。言い表し難い店－ディケンス、ほうき、黄金の靴。彼の哲学－誰もが自分は正義のために戦っていると語り、そして奪い取る。たとえどんな政府であれ良きものでさえあれば。非凡な言葉、顎髯、話し込む、お茶とリンゴのピローグ３個－７５０ルーブリ。）

この記述と『騎兵隊』のテキストとを比較すれば、登場人物ゲダリがこの実在人物に基づいて構想されたことは明らかだ。両者の共通点として次の４点が指摘できる。１）ゲダリの語る哲学は実在人物の言葉をいかにもバーベリ風に敷衍したものである。２）老人の店の様子からディケンスの長編“Ｔｈｅ　Ｏｌｄ　Ｃｕｒｉｏｓｉｔｙ　Ｓｈｏｐ”を連想すること（ディケンスよ、あの日あなたの心優しい影はどこを歩いていたのか）。３）老人の店に置かれている品物の一つが同じである（あの古物店へ来れば、あなたは金をかぶせた舞踏靴と－中略－壊れた鍋とを目にしえたであろうに）。４）老人の外見について－顎髭のあること（白い両手をこすりあわせ、白髭をしごきつつ、－後略－）。

もちろん本文テキストには従軍日記の記述と相違する点、従軍日記に根拠を見出すことのできない点も数多くあり、これらはバーベリの創造によるものと考えるのが適当であろう。重要なものとして次の３点が指摘できる。１）ゲダリという名前。２）ゲダリが盲目であること。３）語り手リュートフが「つつましやかな星」を探してジトミールを歩き回ること。以下、この３点を念頭において、短編『ゲダリ』のテキスト分析を試みたい。

まずゲダリという名前について考えてみよう。ゲダリとは古代ヘブライ語で「神は偉大なり」という意味だが*5、それだけに留まらず、バーベリはこの名を老人に与えることによってジトミールの盲目の骨董商を旧約聖書中の人物ゲダリヤに結びつけているものと思われる。このゲダリヤについては「列王紀略」と「エレミヤ書」に記述があり*6、両者に記されている彼の事蹟を簡単にまとめると次の通りである。

ネブカドネザルによってユダ王国が滅ぼされると、ほとんどのユダヤ人はバビロンに連れていかれ虜囚となった。ユダ王国の故地に残ったのは「貧者」達であり、彼らの長となったのがゲダリヤである。ゲダリヤはネブカドネザルに従順な姿勢を保ち人々に平穏な生活を営むよう呼びかけたが、ユダ王国の再建を目指すイシマエル達によって暗殺された。ここで留意すべきは、ユダ王国崩壊後のこの時期預言者エレミヤがゲダリヤの行き方を支

持し「その地に遺れる民のうちに彼と偕にを」った*7ことである。亡国を目の当たりにして性急な民族再興を願うことなく、神の意思或いは運命を甘受し耐え忍ぶ事を説き、説きつつもかつ民族の受難を深く悲しんだエレミヤとゲダリヤは同じ考え方をしていたと見なすことができる。

ジトミールの骨董商と敗残の地に立つユダヤの指導者とのつながりは単に「ゲダリーゲダリヤ」という名前の象徴性に留まるものではない。短編『ゲダリ』の叙述にはエレミヤ記やエレミヤ哀歌に基く箇所が少なからず見出されるのである。

老ゲダリがリュートフに彼の夢見る「甘き革命」「善人のインターナショナル」について語る部分は、その独特の自問自答の展開においていかにもバーベリの面目躍如たるものがあるが、前掲の従軍日記には「甘き革命」「善人のインターナショナル」といった言葉はない。これらは実在の老人の考えを敷衍してバーバリが考え出したものと思われる。ゲダリは彼の理想の革命とその組織を次の様に定義している。

引用3・А революция-это же удовольствие.И удовольствие не любит в доме сирот.
（・・・）И я хочу Интернационал добрых людей,я хочу,чтобы каждую душу взяли на учет и дали бы ей паек по первой категории.Вот душа,кушай,пожа--луйста,имей от жизни свое удовольствие.（2／30－31）

（　革命とはつまるところ満足するということです。して、満足というものは家に父なし児が泣いてるなぞ好きじゃない。－中略－私が求めとるのは善人のインターナショナルです。どんなしがない奴でも、一人ひとり登録して最小限度の食糧はちゃんと配給してくれる、そういうふうにしてもらいたいのです。おい、しがない奴、どうぞ食ってくれ、食って人生から満足をひきだしてくれ、とね。）

ゲダリのこの発言には一見、『騎兵隊』の他の登場人物のそれと同様の特徴、すなわち高い領域の言葉と低い領域の言葉との結合が見られる（「革命」－「満足」、「インターナショナル」－「最小限度の食糧配給」等）。しかしその結合の方向はコサック兵士達の場合とは正反対である。コサック達は多くの場合、自分達の個人的な行動を「世界革命」や「階級闘争」といった高次の観念によって正当化する。これとは逆にゲダリは「革命」「インターナショナル」といった抽象概念を「満足」「食う」等のより具体的な言葉に置

き換えていく。皆が「大いなる言葉」で語り「国家」「世界革命」といった近代の抽象概念を玩ぶ時代にささやかで平凡な営みの言葉のみで語るゲダリは、確かに他の登場人物に際立って感動的な形象と呼ぶに相応しい。このようなゲダリの位相はまた「エレミヤ記」中のゲダリヤの位相でもあった。ゲダリヤは、ユダ王国の故地に残った民人に次のように呼びかけている。

引用４・シャバンの子アヒカムの子なるゲダリヤ彼らと彼らに属する人々に誓ひていひけるは汝らカルデヤ人に事ふることを怖るるなかれこの地に住てバビロンの王に事へなば汝ら幸福ならん。我はミツパに居り我等に来たらん所のカルデヤ人に事へん汝らは葡萄酒と菓物と油とをあつめてこれを器に蓄へ汝らが獲る所の諸邑に住めと。*8

イシマエル達のように王国の復興のために故地を捨てるのではなく、故地に留まり平凡な営みを貫いてエホバの救いを待つのが、総督ゲダリヤと「彼と偕にを」ったエレミヤの立場であった。そしてそれはジトミールの「バザール」の中に留まり「甘き革命」「善人のインターナショナル」を夢見る老ゲダリの姿と二重写しになる。実際、作品中の次のような何気ない一節でさえ、エレミヤ記中の記述と呼応している。

引用５・Все ушли с базара,Гедали остался.（２／２９）

（　誰も彼もが市場から逃げ去った、ゲダリは居残った。）

・－前略－イスラエルの神エホバかくいひ給ふ。汝らもし信に此の地に留まらばわれ汝らを建てて倒さず汝らを植えて抜かじ。－中略－われ汝らをあわれみまた彼（ネブカドネザル）をして汝らをあわれませ汝らを故地に帰らしめん。*9

また、やはりエレミヤ記中の次の一節を念頭に置くならば、読者が被抑圧階級の解放を謳う赤軍とゲダリとの関係から、ネブカドネザル軍と「ゲダリヤ－エレミヤ」との関係を連想するのはそう難しいことではない。

引用６・　かくて（ネブカドネザルの）侍衛の長ネブザラダンは邑の中に餘れる者とおのれに降りし者およびその他の遺れる者をバビロンに移せり。されど侍衛の長

ネブザラダンはその時民の貧しくして所有なき者等をユダの地に遺し葡萄畑と田地とをこれにあたへたり。*10

バーベリが短編『ゲダリ』を連想する際に「エレミヤ記」を思い浮かべたのは、上の一節をきっかけにしてのことと筆者には思われる。旧約聖書の中でエレミヤは終始一貫してユダ王国の最後の王ゼデキヤの施政に批判的であった。一方ネブカドネザルやカルデヤ人に対しては、彼らがもたらした殺戮と荒廃を痛切に嘆きはするものの、敵対ではなく従順であるよう呼び掛けている。これは、ネブカドネザル達がエホヴァの意志に基いてユダヤ人に災厄をもたらしたためである。

ポーランド軍と赤軍の間で、同様のことは老ゲダリにもあてはまる。ゲダリはかつての支配者であったシュラフタを口を極めて罵る（あの性悪犬のポーランド人ですじゃ。性悪犬がユダヤ人をつかまえてひげをひきぬく。ええ、犬め！）。一方赤軍については彼らがなぜ自分達に残虐な行為をなすのか訝るが、しかし革命そのものを否定しているわけではない（こちらは革命に向かって、革命けっこう、おれは認めておるぞ、としきりにどなっているのに、革命の方では、このゲダリに姿を見せずにおいて、鉄砲玉だけを飛ばしてよこすのですぞ！）。エレミヤがゼデキヤでもネブカドネザルでもない真のエホヴァの救いを待ち望んだのと同様に、ゲダリは「善き人々による善き行い」たる真の革命を希求しているのである（教育のあるわたしども一同はみんな地べたにひれ伏して声をそろえて叫んでおるのです。『災いなるかな我等、甘き革命はいずこにありや』と・・・）。

ここで一度ゲダリその人を離れて、彼を取り巻く環境－ジトミールの街と彼の店の描写を見てみよう。骨董商ゲダリと総督ゲダリヤのつながりを念頭に置く時、ここにも「エレミヤ記」・ユダ王国陥落後のエルサレムを連想させる記述を少なからず見出すことができる。例えば次の描写である。

引用７・У древней синагоги, у ее желтых и равнодушных стен старые евреи продают мел, синьки, фитили, -евреи с бородами пророков,（２／２９）

（古ぼけたシナゴーグの傍、その黄色く無関心な壁の傍で、年老いたユダヤ人達が胡粉、紺青、火縄などをひさいでいる。――古の預言者のあごひげを生やしたユダヤ人達が。）

エホヴァに呼びかける場シナゴーグの前に預言者の顔をしたユダヤ人が立っている。だがその壁はユダヤ人の苦難に関心を示さない。ユダ王国が陥落した時と同じように、ユダヤ人の受難を前に彼らの神は沈黙している。そしてまたミツパの総督ゲダリヤもついに神の声を聞くことはなかった。エレミヤが注7に指摘した箇所でエホヴァの預言を語った時既にゲダリヤは骸となっていたのである。

ジトミールの街とゲダリの店の描写の主調低音は、死・死者・遺骸・荒廃のイメージである。ジトミールについての記述。

引用8・Вот перед мной базар и смерть базара. Убита жирная душа изобилия. Немые замки висят на лотках, и гранит мостовой чист, как лысина мертвеца.

（2／29）

（　そしてバザールとバザールの死が私の前に広がる。豊饒の脂ぎった魂は滅び去った。物言わぬ錠が露店の戸には降り、橋に敷きつめられた御影石は死者の頭の禿のように清らかだ。）

同様の雰囲気はゲダリの店にも色濃くたちこめている。

引用9・В этой лавке есть и пуговицы, и мертвая бабочка. （・・・）Он вьется в лабиринте из глобусов, черепов и мертвых цветов, （・・・）и (он)сдувает пыль с умерших цветов. （2／29－30）

（　この店にはボタンもあれば死んだ蝶もいる。－中略－彼は地球儀やしゃれこうべや死んだ花などから成る迷宮を徘徊し－中略－死せる花の埃を吹き払う）

引用10・Нежная кровь льется из опрокинутой бутылки там, вверху, и меня обволо-кивает легкий запах тления. （2／30）

（　彼処、上方では、引っ繰り返った瓶から優しい血が流れ出し、軽やかな衰微の香りが私をすっぽりと包み込む。）

上記3つの引用箇所のうち、下線部が死や衰微のイメージと言葉として結びつくものである。この種の言葉の頻度はジトミールの街とゲダリの店に関する記述において極めて高

い。ただし、これら死や衰微につながる言葉の多くが比喩的な用いられ方をしていることに注意しよう。（「バザールの死」「死者の頭の禿のように」等）また具体的な事物を指している場合にも、それらは蝶や花といった概して人間が好意を抱くものである。さらに「血」「衰微の香り」と言った言葉にはそれぞれ「優しい」「軽やかな」といった形容詞が付され、これらの名詞があまりに生々しい印象を読者に与えることを防いでいる。

『騎兵隊』諸作品においては、殺戮のシーンや屍体の描写は枚挙に暇のないほどだが、『ゲダリ』のこの種の記述は他の作品の所謂「自然派的記述」とは少しく異なっている。ゲダリのまわりの死と荒廃の有様を、読者は一種抽象化されたものとして受けとめるであろう。ゲダリの立つ地平は旧約聖書のそれを思わせる叙事詩的空間である。

ここまで、ゲダリその人と彼を取り巻く環境について「ゲダリーゲダリヤ」の名前の象徴性に基いて分析してきた。次にバーベリが創作した２つ目のディテール、ゲダリが盲目であることについて考えてみよう。

ゲダリは、ポーランド人によって目をつぶされ盲目であることによって、聖書中の聖人の資格を備えたことになる。彼に関する次の記述はそれを補強している。

引用１１・Он（・・・）склонив голову, слушает невидимые голоса, слетевшиеся к нему.（２／２９）

（　彼は－中略－頭を垂れ、降りかかる目に見えぬ声に聞き入っている。）

「見えなき声」は聖書に拠れば神に属するものであり、キリストと３人の使徒のみがこれを聞くことができる。*11 そして私達はバーベリがゲダリに付与したこのディテールから更に「正しき者は盲目のごとし」という表現をも合わせ連想するべきだろう。*12 ゲダリには明らかに聖者のニュアンスが与えられている。

次にバーベリの従軍日記と作品テキストとの間の第３の相違について検討する。後者に拠れば、語り手リュートフは「ジトミール中かけずりまわって、つつましやかな一つの星をさが」したことになっている。ところが従軍日記の記述を見ると、実際にはバーベリはジトミールにおいて「ポーランド文化の跡を捜し歩いている」のである（１／３６２）。したがって、「つつましやかな星」のモチーフはバーベリが創造したものと考えるのが妥当であろう。このモチーフは『ゲダリ』全編更に『師父』の前半部にまで、繰り返し一貫

して、かつ必ずゲダリと結びつく形で現れる。「つつましやかな星」はゲダリにどのような側面を付与し、どのような役割を作品内で果たしているのか、以下考えてみよう。

最初にこのモチーフが登場するのは冒頭部第２段落である。少し長いがそこまでの全文を引用する。

引用１２・В субботние кануны меня томит густая печаль воспоминаний.Когда-то в эти вечера мой дед поглаживал желтой бородой томы Ибн-Эзра. Старуха в кружевной наколке ворожила узловатыми пальцами над субботней свечой и сладко рыдала.Детское сердце раскачивалось в эти вечера,как кораблик на заколдованных волнах・・・

Я кружу по Житомиру и ищу робкой звезды.（２／２９）

（　安息日の前夜になると、私は追憶のどろりとした感傷に胸を噛まれる。かつてあの夜々が来るごとに、祖父はイブン・エズラの巻々を黄色い顎髭でさらさらと撫で、レースの頭飾りをつけた祖母は、節くれだった指で安息日用のロウソクにまじないをかけながら甘く泣き叫んだものだ。あの夜々子供らしい私の心は、魔法の海を行く小舟のように激しく揺れ動いたのだった・・私はジトミールじゅう駆けずり回り、つつましやかな星をさがす。）

「つつましやかな星」は、リュートフの幼年時代の記憶に動機づけられて作品内に導入されている。そしてその記憶とは安息日前夜のユダヤ人家庭の情景に他ならない。安息日を迎えるこれらの夜々、少年リュートフの心は必ず「魔法の海を行く小舟のように激しく揺れ動いた。」そして、今も彼は「追憶のどろりとした哀傷に胸を噛まれている」のである。ここで「少年の心」を修飾している下線部の比喩に注目しておく必要がある。抽象的な表現ではあるが、この小舟（＝心）が針路を失っているのであることはまず間違いあるまい。

西欧において「星」は伝統的に霊や知識の導きを示す。*13 『ゲダリ』における「星」のモチーフは、この伝統に従って、針路を失ったリュートフの導き手である。

だがこの星は「つつましやか」であり燦然と輝いてはいない。探し求めるリュートフの前に引用７・８に示した死と荒廃に満ちたジトミールの光景が展開し、その後でようやく彼は「星」を見つけるのである。

引用１３・Она мигает и гаснет--робкая звезда・・・

Удача пришла ко мне позже, удача пришла перед самым заходом солнца.

Лавка Гедали спряталась в наглухо закрытых торговых рядах.

（２／２９）

（　それは瞬き、そして消える。つつましやかな星・・・

成功は遅くなってから訪れた。成功は日の沈む直前に私を訪れたのである。ゲダリの店は堅く閉じられた店々の奥に隠れていた。）

上の部分で作品中初めてゲダリについての言及が現れるわけだが、彼は「つつましやかな星」とほとんど同一の存在、その具現として登場している。ゲダリの店に置かれている品物の中に「船の帆綱」と「古めかしい罹針儀」のあることは（２／２９）注目されて良いだろう。明らかにこの二つのディテールは引用１２の下線部と呼応している。西欧文学における「星」の伝統的なイメージと、「針路を失った小舟－船の帆綱・古めかしい罹針儀」というポドテキストとによって、ゲダリはリュートフの魂の導き手としての役割を与えられている。

確かに、この後の記述において、リュートフはゲダリの発言に対し極めて酷薄な応答をしている（「閉じられた目にはたとえ太陽の光だとて入ってはこないのだよ。－中略－だが私達は閉じられた目をこじあけてやるのだ・・・」「（第三インターナショナルでは）火薬をつけてものを喰うのさ。－中略－いちばん上等の血をかけてね・・・」）。だがこれらがリュートフの本音でないことは、『ゲダリ』の終わり近くで彼が安息日前夜のユダヤの伝統に参加したがっていることからも明らかだ（ゲダリ、－中略－今日は金曜日だしそれにもう晩だ。ユダヤ式のビスケットにユダヤ式のお茶、それにそのお茶のコップの中にいる退役の神様が私は少し欲しいのだが、そういうものはどこで手に入るかね？）。

この部分の直前には次のような一文がある。

引用１４・И вот она взошла на свое кресло из синей тьмы, юная суббота.

（２／３１）

（青い闇の中からうら若い安息日がやおら立ち昇り安楽椅子に座を占めた。）

この文は直接には「星」のイメージと結びついてはいない。だが、太陽や月その他の天体が地平線から立ち昇ることを表す動詞взойтиが用いられていること、また「うら若い安息日」が「青い闇の中から」立ち昇るイメージから、読者は容易に星が東の空に現れる情景を思い浮かべることができよう。この文の主語は「安息日」である。作品冒頭部に現れていた「安息日」のモチーフは、ここにおいて魂の導き手である「星」、更にその具現であるゲダリと一つに融け合っている。

作品『ゲダリ』はこの後、安息日が訪れゲダリがシナゴーグに祈禱に出かける所で終わっているが、ゲダリは『騎兵隊』中８番目の作品『師父』にも姿を現している。そして、「安息日」「星」「ゲダリ」これら三つのモチーフの結びつきは、『師父』の前半部ゲダリとリュートフがシナゴーグに向かう場面にも用いられているのである。

引用１５・Робкая звезда зажглась в оранжевых боях заката, и покой, субботний по-
-кой, сел на кривые крыши житомирского гетто. （２／３５）
（　夕焼け空に広がる橙色の戦場につつましやかな星が灯り、ジトミールのユダヤ人の街のかしいだ屋根の上には平安が、安息日の平安が降りてきた。）

これまで見てきたように「安息日」「星」「ゲダリ」の三者は、或は一方が他方の導入を動機づけたり、或は互いに結びついたりして、密接に関連しあっている。「安息日」と「星」のモチーフは、ゲダリの人物像にどのような特徴を付け加えているのだろうか。

作品に直接書かれてはいないが、リュートフは、戦争がジトミールの街にもたらした破壊と殺戮に愕然としたのであろう。「つつましやかな星」を探し求める間のジトミールの描写がこの事を暗示している。彼は革命がなそうとしている変革に共感を寄せようと努めているが、一方ユダヤ人として自分の民族にもたらされた惨禍に動揺を抑えることはできない。リュートフは、価値観が転倒しすべてが急速に移り変わる時代の中で、決して変わることのないものを切望する。それが、安息日前夜に関する幼年時代の記憶であった。引用部１２の第一段落には「老い」や「古さ」を表す単語・表現が数多く散りばめられている。だが、たとえ老い、古びたものであるにせよ、安息日前夜のこの情景はユダヤ人の家庭で太古の昔から繰り返されてきたものだ。リュートフの「導きの星」ゲダリは、一切が打ち壊された廃墟の中で、昔と変わらぬ自分自身の言葉で語った。その姿は、ゲダリヤ・エレミヤがそうであったように無力であるかもしれないが、しかしディアスポラを通じ

保たれてきたユダヤの民の不屈の精神の現れでもある。

リュートフは、幾千年も絶えることなく繰り返されてきた安息日前夜の情景に促されて「星」＝魂の導き手を探し求めた。そして見出したのがゲダリだったのである。リュートフがゲダリの中に見たものは、時の流れの中で決して変わることのないもの、永遠なるものであった。引用１５は、このことを美しく象徴的に表現している。

3.

前節において『ゲダリ』全編及び『師父』の一部を対象として、ゲダリという人物を検討した。ゲダリほどにアイロニーを交えず深い感動をもって描かれている人物は、『騎兵隊』のみならずバーベリの全作品を通しても稀である。だが、語り手のゲダリに対する共感は引用１５の箇所をもって唐突に終わる。この後彼は、強いアイロニーをもってのみ描かれることになる。

ゲダリは、安息日の集まりに参加したいというリュートフの願いを聞き入れ、彼をシナゴーグに連れていく。だがリュートフがそこで出会ったのは、空虚な言葉で威厳を保とうとするラビ・モタレと軽躁なレフ・モロドゥヘであった。シナゴーグの様子は次の様に描かれている。

引用１６・Мы вошли в комнату--каменную и пустую, как морг. Рабби Моталэ сидел у стола, окруженный бесноватыми и лжецами. （２／３５）

（　私達は中へ入った――石造りで死体置場のように虚ろであった。師父モタレは机を前に、精神錯乱者と嘘つきどもとに囲まれて坐っていた。）

・Мы уселись все рядом--бесноватые, лжецы и ротозеи. В углу стонали над молитвенниками <u>плечистые евреи, похожие на рыбаков и на апостолов.</u>

（２／３６）

（　私達は一同並んで席についた。――精神錯乱者と嘘つきと馬鹿の一座であった。片隅では<u>漁師のようでもあり使徒のようでもある肩幅の広いユダヤ人達が</u>祈禱書を前にして何か唸っていた。）

下線部は明らかに十二使徒を念頭に置いた描写だが、これをもってリュートフがシナゴーグのユダヤ人に共感を寄せていると考えることは難しい。先に「精神錯乱者と嘘つきと

馬鹿者の一座であった」と明瞭に反感が示されている以上、下線部は揶揄と見なすのが妥当であろう。стонать（唸る）という動詞が使われていることもアイロニーの調子を一層強めている。

シナゴーグのざわめきの中でゲダリはどのように振る舞っていただろうか。

引用１７・Гедали в зеленом сюртуке дремал у стены, как пестрая птичка.

（２／３６）

（　緑色のフロックを着たゲダリは、色とりどりの鳥のように壁際でまどろんでいた。）

寝穢く眠っている彼の姿には『ゲダリ』において見られたような荘厳さは既にない。ところでここで注目したいのは、ゲダリの身に付けている衣服の色－緑と下線部の比喩である。概してこの時期のバーベリにおいては、語彙や比喩の豊かさに比べ色彩は多様性に乏しい。また比喩の中にも使用頻度の高いものがあり、それらが内包する象徴性は比較的容易に定義できる。「緑」系統の色は死や凋落を象徴しており*14 また鳥のイメージはバーベリの場合生命力の微弱な人物と結びつくことが多い。*15 『ゲダリ』において無力だが不屈の姿を示していた老人は，今や死と衰えの影に覆われてこくりこくりと眠っているばかりである。

『師父の子』になると、ゲダリに対する嘲笑はもはや露骨なものになっている。

引用１８・Смешной Гедали, основатель ＩＶ интернационала , вел нас к рабби Мота--лэ Брацлавскому на вечернюю молитву. Смешной Гедали раскачивал петуш--ные перышки своего цилиндра в красном дыму вечера.（２／１２８）

（　第四インターナショナルの創始者、あの愉快なゲダリは、夕べの祈りをするために私達を師父モタレ・ブラツラフスキイのもとへ連れて行った。愉快なゲダリは、夕べの赤い煙の中で、シルクハットにつけた鶏の羽根をしきりに振り動かした。）

では、リュートフのゲダリに対する観方の突然の変化、ゲダリについての叙述の基調の移り変わりは一体何によってもたらされたのだろうか。この事を考えるためには、別の登

場人物イリヤ・ブラツラフスキイを検討する必要がある。引用１７・１８のゲダリに対する嘲笑的な叙述は、いずれもこのイリヤと連関する形でなされているからである。引用17の直後の文でイリヤは作品中に初めて姿を現す。（ただし『師父』においては彼の名前はまだ明らかにされていない。）一部重複するがこの場面を下に引用する。

引用１９・Гедали в зеленом сюртуке дремал у стены, как пестрая птичка. И вдруг я увидел юношу за спиной Гедали, юношу с лицом Спинозы, с могущественным лбом Спинозы, с чахлым лицом монахини.（２／３６）

（　緑色のフロックを着たゲダリは、色とりどりの鳥のように壁際でまどろんでいた。ふいに私はゲダリの後ろに一人の若者がいるのをみとめた。スピノザのような顔の若者、スピノザのように広い額と修道女のようにひ弱な顔をした若者であった。）

この場面を視覚的に想像すると、老い疲れ眠りこけたゲダリの背後に秀でた額と哲学的かつ瞑想的な顔をした若者イリヤが立つ光景は極めて印象的である。これ以後ゲダリに関する具体的な叙述が二度とないことを考え合わせるならば、イリヤの登場そのものがゲダリの否定であると言うことさえ可能であろう。少なくとも、これ以降リュートフの視点はイリヤに焦点が定まり、ゲダリは忘れられてしまっている。

引用１８は『師父の子』の第２段落だが、この作品はハッシード教の一分派の師父の血統につながるイリヤが、先祖伝来の教えを捨て赤軍に参加するが戦病死し、その最後をリュートフが看取るという物語である。イリヤを主人公とするこの作品の冒頭にゲダリへの言及があることは、ゲダリとイリヤ両登場人物の密接な結びつきを傍証している。

まず第一に、イリヤが『騎兵隊』においてどのような役割を果たしているのか考えなければならない。彼が主人公である『師父の子』は、１９２６年の初版以来１９３１年第５版で新たな短編『アルガマク』が付け加えられるまで、配列において『騎兵隊』最後の作品であった。『ゲダリ』が集中第６編、『師父』が第８編、一方両作品と強い関連を持つ『師父の子』が第３４編であるという構成上の不自然さからみても、作者がイリヤの物語をラストに置いて、彼を読者に強く印象づけたかったのであろうことが推測される。

引用２０・И я, едва вмещающий в древнем теле бури моего воображения, --я принял

последний вздох моего брата. （２／１２９）

（　そして私は、古代の血を引く身体に自分の想像力の嵐をようよう混ぜ合わせながら、――私は我が兄弟の最後の息を看取ったのである。）

『騎兵隊』の全登場人物の中で、リュートフが「兄弟」と呼ぶのはこのイリヤ・ブラツラフスキイだけである。バーベリがイリヤを読者に印象づけたかったのは、リュートフとイリヤの近親性の故であろうと思われる。

イリヤもゲダリと同様に、名前の象徴性によって旧約聖書中の登場人物と結びついている。ただし『師父の子』は、『ゲダリ』のようにディテールや叙述の多くが旧約聖書と関係を持つ作品ではない。名前の象徴性を暗示しているのは引用２０下線部の記述である。リュートフは、「古代の血を引く身体」＝イリヤ・ブラツラフスキイに自身の「想像力の嵐」＝旧約聖書に基づく神話的想像力を「混ぜ合わせている」のである。

名前の象徴性によって、チェルノブイリ朝の末裔にして赤軍兵士イリヤ・ブラツラフスキイが結びついているのは、列王紀略上１７－２２章・同下１－２章に記述されている預言者イリヤである。彼はユダ王国にバアル神信仰の蔓延することを深く憤り、バアル神信者と公衆の面前で対決した後に彼らを皆殺しにした。

引用２１・エホヴァよ我に応へたまえ我に応へたまえ此民をして汝エホヴァは神なることおよび汝は彼等の心を翻したまふということを知しめたまへと。時にエホヴァの火降りて播祭と薪と石と塵とを焚つくせりまた溝の水を涸渇せり。民皆伏ていひけるはエホヴァは神なりエホヴァは神なり。エリヤ（イリヤ）彼等に言ひけるはバアルの預言者を執へよ其一人をも逃遁しむるなかれと即ち之を執へたればエリヤ之をキシヨシ川に曳下りて之を殺せり。*16

預言者イリヤのパトスはエレミヤのそれとは極めて対照的である。エレミヤが悲嘆にくれながらも忍従と運命の甘受を説くのに対して、イリヤの場合には天からの火が偶像を焼きつくし、異端者を虐殺することをも厭わない。「荒ぶる預言者」イリヤに見られるのはエホヴァの教えへの絶対的な確信とそれを分かちあわない者達への激しい敵意である。

エレミヤとイリヤの間のこのようなパトスの相違は、『騎兵隊』において「母」のモチーフをめぐるゲダリとイリヤ・ブラツラフスキイの対照的な発言となって反映している。

『師父』の冒頭でゲダリはリュートフに次のように語る。

引用２２・－・・Все смертно.Вечная жизнь суждена только матери.И когда матери нет в живых ,она оставляет по себе воспоминание ,которое никто еще не решился осквернить.Память о матери питает в нас сострадание ,как оке--ан,безмерный океан питает реки,рассекающие вселенную・・（２／３５）

（　・・すべては死ぬ運命にあるのです。永遠の命は母にだけ許されている。母というものは生ける者達から立ち去っても後に思い出を残しますからな。その思い出をあえて汚そうとした者はいまだかつて一人もおりませぬ。母親の思い出は憐れみの心を育む。それはちょうど大海が、あの無際限の大海がこの世を縦横に貫く河を育むようなものなのです・・・）

「母なるもの」の不死と永遠性を語るゲダリに対し、イリヤ・ブラツラフスキイは瀕死の床においてリュートフに次のように述べる。

引用２３・-Я был тогда в партии,-ответил мальчик(Илья),царапая грудь и корчась в жару,-но я не мог оставить мою мать・・・

-А теперь,Илья?

-Мать в революции-эпизод,-прошептал он,затихая.　（２／１２９）

（　「入党していたよ。」胸をかきむしり、高熱に身をよじりながら少年は答えた。「でも母を置き去りにはできなかったんだ・・・」

「そして、イリヤ、今は？」

「母は革命の中ではエピソードに過ぎない。」彼は落ち着きを取り戻しながら、ささやいた。）

「荒ぶる預言者」の名をもつイリヤは、ゲダリによれば永遠なるもの＝母をエピソードにすぎないと断じ、革命に参加していく。ゲダリが通うシナゴーグの硬直した閉鎖性とイリヤが身を投じた苛酷だが広々として活気ある世界との対照は『師父』終わり近くに印象的に描かれている。

引用２４・Рабби благословил пищу ,и мы сели за трапезу .За окном ржали кони и вскрикивали казаки.Пустыня войны зевала за окном.（２／３８）

（　師父は食事に祝福を与え、私達は食卓に向かった。窓の外では馬がいななき、コサック達が何やらさけんでいた。戦場の荒廃が窓の外で口を開けていた。）

先にイリヤ・ブラツラフスキイとリュートフの近親性と述べたが、これをテキストに基づいてもう少し詳しく考えてみる。両者は、たとえばシナゴーグで行われている安息日の儀式に対する拒絶の姿勢において一致している。このことは『師父』の終わり近く、両者が並立して描かれていることで読者に強く印象づけられている。

引用２５・Сын рабби(Илья) курил одну папиросу за другой среди молчания и моли--твы.Когда кончился ужин,я поднялся первый.（２／３８）

（　師父の息子は沈黙と祈禱のただ中で、次から次へと紙巻きを吸い続けた。食事が終わった時、私は真っ先に立ち上がった。）*17

イリヤという名が旧約聖書中おそらくもっとも熾烈な預言者にちなんでいるように、リュートフという名前も лютый（凶暴な）という形容詞から作られたものである。*18 バーベリがイリヤやリュートフの命名によって何を暗示したかったのかは明らかであろう。彼等ユダヤの若く新しい世代は、旧態依然たるハッシードの徒達はもちろんのこと、ゲダリのエレミヤ的パトスとも訣別して、革命という凶暴なものへ、預言者イリヤ的な荒々しいパトスをもって積極的に参加しようとしている。

引用２６・Мы расстались с Гедали, я ушел к себе на вокзал .Там,на вокзале ,в агитпоезде Первой Конной армии меня ждало сияние сотней огней,волшеб--ный блеск радиостанции,упорный бег машин в типографии и недописанная статья в газету «Красный кавалерист».（２／３８）

（　私はゲダリと別れ、わが場所、駅へ向かった。駅の第一騎兵隊アジ列車で私を待っていたのは、何百もの電灯の輝き、魔法の如き無電局の閃光、印刷機の力強い疾走、そして『赤い騎兵』に送る書きかけの原稿であった。）

『師父』のラストシーンである。最初の一文は単に物理的にゲダリと別れたというだけでなく、更に精神的な別れをも意味しているように思われる。先に述べたエレミヤ的パトスとの訣別である。そしてリュートフは「自分の場所」へと（ к себе ）帰る。そこに彼が見たものは、薄暗いシナゴーグとは対照的な「何百という電灯の輝き」、ロシア全土と連絡し会うための「無電局の魅惑的な閃光」などであった。ジトミールの古物店に留まっているゲダリには思いもよらぬ広大な世界に、リュートフやイリヤは踏み出して行ったのである。

だが彼等ユダヤの新しい世代は、ゲダリに象徴される永遠なるものと果たして完全に訣別しえたのであろうか。リュートフは『師父』以降も、コサック兵士達の言動に同化しようとして果たせず、『ゲダリ』におけると同様の煩悶を繰り返す。彼の視線は自民族の悲劇に注がれがちであり（『コジノの墓地』他）「人間を殺す能力を切に運命に乞い求め」たりもする（『たたかいのあと』）。『騎兵隊』全編を通じてリュートフは、古い価値観と伝統に立て籠もるユダヤ人と新しい価値観を標榜するコサック達、両者の間を揺れ動き続けるのである。同様のことはイリヤ・ブラツラフスキイにも当てはまる。『師父の子』の終わり近くに記されているイリヤの所持品とは次のようなものであった。

引用２７・Здесь все было свалено вместе--мандаты агитатора и памятки еврейско--го поэта .Портреты Ленина и Маймонида лежали рядом .Узловатое железо ленинского черепа и тусклый шелк портретов Маймонида .Прядь женских волос была заложена в книжку постановлений Шестого съезда партии,и на полях коммунистических листовок теснились кривые строки древнееврейс--ких стихов. （２／１２９）

（ ここではすべてがいっしょくたになっていた。――アジ運動員の委任状とユダヤの詩人の覚書き。レーニンとマイモニデスの肖像画が並んで転がっていた。レーニンの節くれだった鉄のような頭蓋と、くすんだ絹のようなマイモニデスの肖像画。女の巻き毛がひと房第６回大会決議文集の中に挟んであり、党のアジビラの余白には古代ヘブライ詩歌のくねった行がびっしりかきこまれていた。）

古来からのユダヤ的なものと革命的なものとが一対一対応に並列されている。イリヤも

またリュートフと同様のジレンマに陥り、それを解決することなく死んだのである。既に述べたように、ゲダリが名前の象徴性のみならず作品中の多くのディテール・表現によって「エレミヤ記」他との結びつきを強調されエレミヤ的パトスを十全に体現しているのに対し、イリヤと旧約の預言者との結びつきは名前の象徴性によって暗示されるに留まる。むしろ次のような「自然派的描写」によって、イリヤは荒々しく男性的な預言者イリヤから遠ざけられ、「貶められ」てさえいる。

引用２８・Голые колени, неумелые, как у старухи, стукались о ржавое железо ступе--нек; две толстогрудые машинистики в матросках волочили по полу длинн--ое застенчивое тело умирающего .(・・・) Девицы, уперши в пол кривые ноги незастейливых самок сухо наблюдали его половые части , эту чахл--ую, курчавую мужественность исчахшего семита. (２／１２９)

(老婆のように頼りない裸の膝が昇降段の錆びついた鉄板にぶつかった。水平服を着た豊かな胸のタイピストが２人、床の上に転がった死につつある者の長い恥ずかしそうな肉体を引きずった。－中略－娘っこ達は色気のない曲がった雌の脚を床に突っ張ったまま、彼の性器を、瀕死のセム族のこの萎えたちぢれた男根を、つまらなそうに見守っていた。)

－下線部は「自然派的描写」－

ときに名前とは祈りであろう。イリヤ、リュートフの名前の象徴性は、彼らが自分の名前を体現しているというよりもむしろ彼らの願望の表現である。イリヤが主人公たる『師父』の後半部および『師父の子』に旧約聖書との関連を暗示するディテール・叙述が乏しいのは、信じることと憎むこととがイリヤの願いに留まっているためである。

従軍日記にはイリヤに該当するような人物は見当たらない。イリヤという人物はバーベリの想像力の所産と思われる。*19 作者バーベリと語り手リュートフとを同一の人物と見なすことはできないが、しかし彼らの間に多くの類似点があることも事実である。*20 バーベリはリュートフと同様の存在であるイリヤを作りだし、彼を通して古きものと新しきものとに引き裂かれている自分の在り方をリュートフに再確認させた。リュートフの在り方はまたバーベリのものでもあったはずである。新しきものソヴィエト体制に適応していきたいという願望と古きユダヤ的なものへの郷愁、両者の葛藤こそバーベリの内面におけ

る終生のドラマであった。

4.

以上、『騎兵隊』中の『ゲダリ』『師父』『師父の子』3編を対象として、ゲダリまた彼との関連からイリヤ・ブラツラフスキイの人物像の分析を試みた。最後に分析の結果を簡単に振り返り、また若干の補足を加えたい。

バーベリほど同時代人に熱狂的に迎えられた作家も稀だが、*21 批評家達が一致して高く評価したのはバーベリのмастерство（名人芸、手腕といった程の意味）であった。この時代、文学においてмастерствоという言葉は主に文体に関して用いられていた。本稿で行ってきた分析からバーベリの文体の特徴は明らかであろう。比喩の多用、比喩と比喩とが密接に絡み合って更に高次のポドテキストを形成すること、神話的モチーフ・イメージの多用等、彼の文体はベールイを先駆としてレーミゾフ、ピリニャーク他１９２０年代のロシア文学に支配的だった「装飾的散文」の系譜に連なるものである。バーベリに対する異常なまでの反響の大きさを理解するためには、当時の文学的雰囲気を考慮に入れる必要がある。

ただし、バーベリの方法には装飾的散文のそれと大きく異なる点が一つある。レーミゾフをその最も顕著な例として、装飾的散文の作品においては、比喩が新たな比喩を生み、又プロットと関係のないエピソードが連想によって次々挿入される等謂わば脱中心的・拡散的な構成となることが多い。これに対しバーベリの場合には、既に述べたように一切の要素が登場人物のパトスに帰結するように作品が組み立てられている。『ゲダリ』の叙述の多くが旧約聖書エレミヤ記と結びつき主人公のエレミヤ的パトスを際立たせる働きをしていることはその一例であろう。バーベリの作品は極めて求心的・収斂的であると言えよう。

ステパーノフが述べているように、装飾的散文と緻密な構成性とを結びつけた点にバーベリの独創性があるわけだが*22 前者が１９世紀末以来の文学流潮に根ざすものであることは明らかとしても、バーベリの散文のもう一つの特徴－構成性は一体いかなる要因によって形作られたものであろうか。

第一に考えられるのは、西欧特に秩序と形式を重んじるフランス文学の影響である。バーベリは、国際的で多様な民族の混住する都市オデッサのユダヤ人中産家庭に生まれ育った。早くから数カ国語を身につけていた彼は、ロシア文学よりもむしろ西欧文学によって

文学的自己を形成したのである。彼がフローベール、モーパッサンに傾倒していたことはよく知られており、また創作を始めた当初、彼はフランス語で書いていた。*23

これは第二に気質の問題でもあろう。装飾的散文の系譜に属する作家たちが範を仰いだゴーゴリは、普段から極めてパセティックで表情や身振り豊かな話し手だったという。エイヘンバウムは、ゴーゴリ自身のこのような「語り手」としての性格が彼の作品と分かち難く結びついていることを明らかにしている。*24 一方バーベリも優れた話し手だったがその語り口はいたって平静で身振りしぐさもあまり豊かな方ではなかった。*25 エイヘンバウムの論に従うなら、このようなバーベリの気質が、叙情的逸脱の少ない意識的・構成的な彼の方法に反映していると言うことができる。

第三の要因として考えられるのは、１９２０年代のロシア文化状況全般に大きな影響を及ぼしたアヴァンギャルド演劇・映画である。メイエルホリドの「ビオメハニカ」はスタニスラフスキイ流の内面分析を廃して或る状況における行動のみを人間のパトスと見なし身体表現化するものであったが、これには、内面心理や成長・発展というものを持たず人間というよりも類型という仮面を付けた人形をときに思わせるバーベリの人物につながるものがある。*26 バーベリはまた、脚本家として映画という新興ジャンルに積極的に協力した最初の作家の一人でもあった。*27

寓意・メタファーによる人物や状況の設定の類型化、類型同士のコントラスト、方法の意識的な顕在化、ジャンルの条件性を積極的に強調すること等、バーベリと１９２０年代の演劇・映画との間には多くの共通点が指摘できる。両者の間の影響関係を実証的に検討することは本稿の課題ではないが、バーベリがメイエルホリドやエイゼンシュテインの同時代人であったことは考慮に値する事実であろう。

ところでバーベリのこのような収斂的な方法は、結果として個々の作品の時空間を著しく狭めざるをえない。アネクドートへの嗜好はバーベリと装飾的散文作家達に共通しているが、後者が連想や語呂合わせ等を通じて、或いはときにいかなる動機付けもなしに、自由にアネクドートとアネクドートをつなぎ合わせて作品の時空間とその内部の多様性を拡げていくのに対し、バーベリは主に個々のアネクドート・個々の人物のパトスを解明・表現することに意を砕き、複数のアネクドートを渾然として１つの作品にまとめあげることは不得手であった。（後にバーベリは長編の執筆を目指しているが、そのすべてが中絶している。）*28 この点を補うためにバーベリが用いたのが『騎兵隊』に見られるような個々の作品をテーマ・ポドテキスト・登場人物によって緩やかにつなぐ「作品群」とでも呼

ぶべきジャンルである。今回3つの短編の分析を通して明らかにしたように、『騎兵隊』の各短編はその主人公を核として収斂的であり、独立した作品である（『ゲダリ』ーエレミヤ的パトス、『師父の子』ーイリヤ的パトス）。だが各作品ではそれぞれ核を志向しているモチーフが、一方ではポドテキストのレベルにおいて言わば作品横断的に互いに結びついているのである（一例として「母」のモチーフ。引用２２・２３参照）。

バーベリ文学の本質は極めて純度の高いパトスの劇にある。このような資質をもって小説というジャンルにおいて創作することは本質的に極めて困難な作業であった。小説の作品世界が読者に納得して受け入れられるためには、たとえ途中に叙情的逸脱が挿入されようとも一貫したストーリー、登場人物の心理的・社会的在り方の定義、また人物が変化成長していくならばその必然性の解明他が必要不可欠だが、「最も興味深い5分間」にのみ関心を向けるバーベリには、これらパトスを展開する前提となるもの、砕けて言えば「説明」的な叙述をなすことができなかったのである。

このようなバーベリが個々の作品のパトスを読者に強調する有効な方法として、また作品と作品とを結びつける契機として好んで用いたのが、名前の象徴性の方法であった。したがって例えば『騎兵隊』におけるドラマ性も、ストーリーや時空間の展開・発展にではなく、エレミヤ的パトスとイリヤ的パトスの葛藤といったポドテキストのレベルにある。この象徴性の出典はバーベリにおいて多様であるが、本稿で取り上げた3編のように聖書特に旧約から採られた例が多い。だがこれをもってバーベリがユダヤ教やキリスト教に基づいて『騎兵隊』の作品世界を組み立てていると考えるのは早計だろう。本稿では旧約聖書との結びつきの顕著な3編を取り上げたが、『騎兵隊』の中には従軍時のバーベリの実体験・見聞に主として基づいた作品、実際の歴史的事件が主要なモチーフとなっている作品も少なくなく、これらの作品と相並んで配列される時、旧約はかなり有力ではあるがしかしあくまでも相対的なモチーフに留まる。

ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』が福音書のコンテキストに正しく基づいて構成されていることが近年の研究で明らかになりつつあるが、このようなことは『騎兵隊』にはあてはまらない。例えば本稿で取り扱った3編を見ても「エレミヤ的パトス」から「イリヤ的パトス」への移行は旧約聖書の時間軸に逆行している。バーベリが関心を払ったのは生の多様性ではなく副次的なものを取り払ったパトスだけであるという趣旨のことを先に述べたが、彼のこの姿勢は神話中の人物に対しても同様に貫かれているのである。

最後に、本稿で取り扱った3編の主題について触れておきたい　。『ゲダリ』『師父』

『師父の子』を貫くテーマは１９世紀中葉以来ロシア文学においてしばしば取り扱われてきた世代間の葛藤、「父と子」の問題である。だがこの３編に限らず、バーベリにおいては「父と子」の関係が他の作家に比べより複雑でアンビヴァレントなものとなっている。ツルゲーネフの『父と子』、ドストエフスキイの『悪霊』に見られるような理念・世界観における世代間の完全なる断絶・対立はバーベリには見られない。彼において世代間の葛藤は思想的と言うよりもむしろ感覚的なものであり、断絶ではなく敬愛と軽蔑の間を揺れ動く感情、対立と言うよりもむしろ違和感とでも名付けるべきものである。リュートフのゲダリに対する態度、イリヤ・ブラツラフスキイの母親に対する感情などはその典型的な例であろう。バーベリにおいては「子」の世代は「親」の世代を少なからず理解し、むしろそれゆえにこそ激しい言葉でもって「親」を否定するという風である。過去に対するロシア人作家達の断続性とは対照的なこのバーベリの継続性が何に由来するのか、筆者は今のところ納得のいく説明を見出すことができない。本稿ではこの問題を提起するに留め、その解明は今後の課題とすることにする。

注

1・ <О творческом пути писателя>,Исаак Бабель:сочинения в 2-х томах.М. 1990. Т.2-й,стр.401 . 以下本稿におけるバーベリの引用は、特に言及する場合を除いて同著作集に基づく。引用末尾の数字は巻数とページ数を表す。

2・ 拙訳。以下『騎兵隊』の和訳は木村彰一氏のものに基づき、必要に応じて筆者が若干文章を改める場合もある。『騎兵隊』以外の訳については文責は筆者にある。

3・ Жужа Хетени:Библейские мотивы в <Конармии> Бабеля,Studia Slavica Academiae Scientiarum Hungarie,27(1981),p.234.

4・ 『騎兵隊』は1920年のソ連・ポーランド戦争を背景としているが、バーベリはこの戦争に実際に従軍しその際の見聞をノートに書き留めた。所謂“Конармейский дн--евник”「騎兵隊日記」である。現在バーベリ未亡人ピロシコヴァ女史の元にその一部が残っており、上記２巻選集に残存部分のすべてが収録されている。従軍前半の部分は散逸したものと考えられている。

5・ Библейская энциклопедия,М.1891. Труды Архимандрита Никифора.стр.156.

6・ ただしロシア語の聖書ではこの人物は Годолия （ゴドリヤ）と呼ばれ、Гедалия-

Гедали（ゲダリヤーゲダリ）とは一応別の名前とされている。だがどちらの名前も古代ヘブライ語における意味は同じである。（前掲の事典によればГедалия=велик Господи,Годолия=велик есть Господиの謂）事実、カトリック・プロテスタント系の聖書では２つの名前の間に区別を設けていない。（英語＝Gedaliah、仏語＝Gue--dalia、独語＝Gedalia ）バーベリが老古物商の名前としてロシア語風のゴドリヤではなく西欧風のゲダリヤを選んだのは、後者の方がカトリック圏に属するポーランドの住人の名前としてより自然に響くと判断したためと思われる。東ポーランドに住むユダヤ人にとってゴドリヤよりもゲダリヤの方が一般的な名前であったことについては、例えばポーランド出身のユダヤ人作家Isaac Bashevis Singer の『騎兵隊』と同じガリツィヤ地方を舞台にした長編“Satan in Glory”にゲダリという人物が登場すること等からも窺われる。本稿では以下、便宜上、旧約中の人物をゲダリヤ、『騎兵隊』中の人物をゲダリと呼んで区別することにする。

7・ エレミヤ記第４０章６節。ゲダリとエレミヤの在り方が同一であることについてはエレミヤ哀歌第３章２６－３０節も参照のこと。なお聖書からの引用はすべて日本聖書協会1980年発行舊新約聖書引照付による。

8・ エレミヤ記第４０章９－１０節。

9・ 同上第４２章９－１０・１２節。

10・ 同上第３９章９－１０節。

11・ マタイ福音書第１７章５節、マルコ福音書第９章７節、ルカ福音書第９章３５節。この指摘はЖужа Хетенの論文に拠る。前掲論文 стр. 235 参照。

12・ エレミヤ哀歌第４章１３－１４節。

13・ アト・ド・フリース著「イメージ・シンボル事典」大修館書店、1984、602 ページ一例として三博士をベツヘレムのみどりごキリストのもとへと導いた星（マタイ福音書第２章９－１１節）。

14・ バーベリが用いる色の持つ象徴性についてはT.W.Clyman:Babel as colorist,Slav--ic and East European Journal N.3(21),1977に詳しい。

15・ 一例として“Как это делалось в Одессе ”におけるムギンシテイン親子の描写。‘Жил себе невинный холостяк,как птица на ветке.’(1/132) ／‘Тетя Песя дрож--ала,как птичка.’(1/135)

16・ 列王紀略上第１８章３７－４０節。

17・ この引用よりも前にレブ・モルドゥヘがイリヤの口から煙草をもぎ取り、これを罵るという場面がある。シナゴーグにおいて祈りの最中に煙草を吸うことは神への冒瀆であり、反逆的な態度なのである。

18・ ただしバーベリが自ら志願してユーゴロスタ通信社特派員として第一騎兵隊に参加した際、彼はコサックの間に根強い反ユダヤ感情を考慮してキリル・ヴァシーリエヴッチ・リュートフКирилл Васильевич Лютов という組織名を実際に用いている。Ушел Спектор:Собкол <Красного кавалериста>,Красное знамя 8 янв.1978,стр.4.

19・ 確かに従軍日記6月3日ジトミールの項、バーベリがシナゴーグを訪ねた際の記述にはこのシナゴーグを司る師父の息子について言及がある。(Сын-благородный ма--льчик в капотике.1/363)だが彼への言及はこれだけであり、作品中に見られる祈禱に対する反抗、「スピノザのような顔」等はバーベリの創作と見なすのが妥当である。ちなみに、『師父の子』の背景となっている第一騎兵隊総撤退に関する項にも、イリヤ・ブラツラフスキイに該当するような人物を見出すことはできない。

20・ 眼鏡の着用、学歴、出自（オデッサ出身のユダヤ人）、赤軍内での資格（軍機関紙「赤い騎兵」の通信員）等。注18も参照のこと。

21・ コンスタンチン・フェーディンはゴーリキー宛1924年7月16日付の手紙で「最近バーベリがモスクワを騒がしています。－中略－誰もが彼に夢中です。」と述べている。Литературное наследство т.70.М.1963.стр.475.

22・ Н.Степанов:Новелла Бабеля, И.Э.Бабель:статьи и материалы <Академия> 1928. стр.13-15.

23・ Автобиография, И.Бабель:Избранное.М.1957. стр.11.

24・ エイヘンバウム「ゴーゴリの『外套』はいかにつくられたか。」ロシア・フォルマリズム文学論集1　せりか書房　所収。小平武訳。

25・ 筆者によるバーベリ未亡人ピロシコーヴァ女史へのインタビューの際の同女史の回想に拠る。1992年6月11日、モスクワ市ペトロフスコ・ラズモフスキー通りの女史の自宅にて。

26・ バーベリの戯曲というジャンルへの傾斜については1935年2月24日付母親宛書簡を参照のこと。（1／346）「私には奇妙な変化が起きています。散文は書きたくありません。ただ演劇という形式においてのみ・・・」

27・ バーベリはエイゼンシテインの未完の映画『全線－古きものと新しきもの』の制作

協力者であった。なお『騎兵隊』中『ノヴォグラドのカトリック教会』『聖ヴァレントのもとにて』の叙述法には、明らかに映画の手法の影響が認められる。

28・ ただしピロシコーヴァ夫人によると、1939年バーベリが逮捕された際、多くの原稿も同時に没収された。その中には長編の完成稿もいくつか含まれていたとのことである。これら没収された原稿は現在までのところ発見されていない。

参考文献

Исаак Бабель:Избранное в 2-х томах.М. 1990.

И.Бабель:Избранное.М. 1957.

Воспоминания о Бабеле.М.1989.

世界の文学28「ゴーリキー・バーベリ」中央公論社 1966

Жужа Хетени:Библейские мотивы в <Конармии> Бабеля.Studia Slavica Academicae scienticirum Hungarie 27 (1981)

Спектор,Ушел:Собкор <Красного кавалериста>.Красное знамя 8 янв.1978.

Степанов,Н:Новелла Бабеля, И.Э.Бабеля:статьи иматериалы <Академия>. 1928.

Clyman,T.W:Babel as corolist, Slavic and East European Journal N.3(21).1977.

エイヘンバウム：ゴーゴリの『外套』はいかにつくられたか／ロシア・フォルマリズム文学論集1 せりか書房 1984 (小平武訳)

Библейская энциклопедия:Труды Архимандрита Никифора.М.1891.

Литературное наследство т.70. <Горький и советские писатели,неизданная перепи--ска.> М. 1963.

アト・ド・フリース：イメージ・シンボル事典 大修館書店 1984

日本聖書協会：舊新約聖書引照付 1980